

遠隔授業 Q&A

遠隔授業プログラム『MESH™を使って、発明家にチャレンジ!』を実施している、ソニー株式会社さんに、遠隔授業にまつわる質問にお答え頂きました。

PROFILE



岡田 康宏
ソニー株式会社
サステナビリティ推進部
CSR グループ

PROFILE



塩田 真吾
静岡大学教育学部 准教授
静岡大学発ベンチャー企業
(一社) プロフェッショナルを
すべての学校に 代表

対面での授業と、遠隔授業を比較してみてくださいか？

◇ソニー岡田さん

授業の2コマ目に、カメラを通して企業の人に発表するというのは、子どもたちは緊張もするのですが、子どもたちが発表に向けて「やらなきゃ！」というモチベーションにもなっているように感じます。出張授業で教室で一対十人でやる授業よりも、1対1グループ(2・3人)でやるシチュエーションというのは、子どもたちのモチベーションにつながるし、発表をやりきったあとにも、子どもたちに達成感があるように感じます。

◇プロ学 塩田

従来出張授業で企業の人と話をして問題解決をする授業もあるのですが、限られた時間の中で子どもたちはアイデアを考え、発表しなくてはなりません。また、当日学校に来た、はじめて会った人に発表しないとダメです。1コマ目に、次の時間にこういう人が自分たちの発表を評価してくれるんだよ。ということをしっかり伝えておくと、子供たちにとって次の発表の時間がすごく楽しみになります。この企業の人が、こんな風に評価してくれるんだというのが、遠隔授業の方が伝わりやすいように感じています。



授業の1コマ目では、次回のゲストを紹介します。

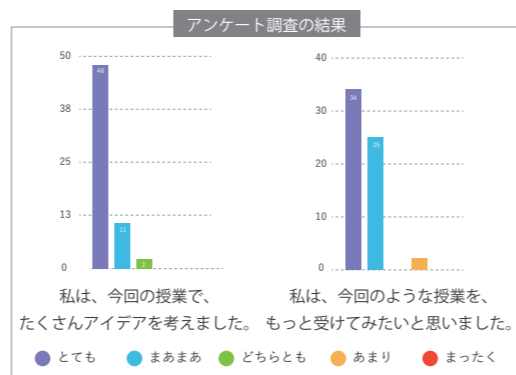
CSR活動はどのように評価していますか？

◇ソニー岡田さん

CSR活動の評価はとても難しいポイントではあると思います。こういった遠隔授業という教育支援を行っていくにあたって、我々は「教育格差の縮小に貢献したい」という目的があるので、遠隔授業をやることでこれまでの出張授業では届けることができなかったところに、授業を届けることができるという点では、大きな効果・成果だと思っています。

データ面では、プロ学さんと連携して毎回の授業でのアンケートをとって、そこで子どもの積極性や発想力、将来を考えるきっかけになったか？など、データを収集して分析していくことも重要だと思っています。

また、CSR活動を弊社が行っていくことで、いろいろな企業が多く参加して下さったり、こういった遠隔授業の仕組みや連携が広がっていき、世の中のムーブメントをみんなで作っていきこう！というところまでつなげていけたら、CSR活動の大きな成果だと思っています。



実施回数の問題はどのように考えていますか？

◇ソニー岡田さん

教育支援ではどこまでスケールを広げていくのかを考えることは、重要なポイントだと思います。遠隔授業の実施回数を増やすには限界があり、それだけで教育格差を完全になくすことは困難です。スケールを広げることだけにこだわらず、その取り組みをして、しっかり効果検証をし、その成果・モデルとなるスキームを他の企業が取り入れてくれたり、世の中の人々がその社会課題に目を向けてくれたり、そのような波及効果までないといけないと思っています。

学校との事前のコミュニケーションはどうされていますか？またその負担感はどうですか？

◇ソニー岡田さん

学校とのやりとりは、プロ学さんにお任せしている部分が多いです。プロ学さんにやっていただけて助かっている部分は、MESH™というプログラミングブロックを導入した授業ですので、MESH™の基本的な使い方やトラブルシューティング、授業の進め方などの資料を作っていただき、それを読むことで先生だけでも授業ができるような流れづくりをしてくださっているところです。

導入の時は、事前にリソースはかかるという見方もあるとは思いますが、1度導入すれば、その資料をもとに先生たちがやれる部分もありますし、学校側のICT支援員が増えたり、先生自体のITの知識が増えていくことで、学校の先生と企業側だけで遠隔授業が実施できるタイミングもくるのかなとも思っています。



1コマ目の授業の様子

◇プロ学 塩田

従来出張授業では、学校の先生から企業が1コマお任せされるという形が多かったのですが、遠隔授業では現場の先生がかなりイニシアチブをとって1コマ目の授業を行い、2コマ目の発表の時間までを持っていくということになりますので、先生側が主体的にやっていくことになります。そうすると必然的に授業の質は上がっていきます。企業の人にお任せではなく、先生が主体になれば授業時間も確保されますし、終わってからのフォローなど生まれてきます。その点からも、より充実した企業の授業には、先生の対応も鍵になっていくように思います。

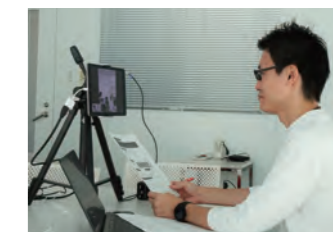
会社内の協力をどのように得ていますか？ また、社員にどのような人物像、スキルが求められますか？

◇ソニー岡田さん

社員のメリットの1つは、時間を効果的に使える点です。時間は30分程度と限られていますが、子どもたちのアイデアを聞いて効果的にコミュニケーションできるようなプログラムになっています。

2つ目は、子どもたちのアイデアが、今後の製品を開発していくためのフィードバックになることも大きなポイントだと思います。子どもたちは、想像以上のクリエイティビティでアイデアを発表してくれます。特に離島や山間部の子どもたちは、また都会の子どもとは違ったアイデアや発想力があると思うので、新しい使い方や組み合わせなどの発見が常にあるはずなので、そこもビジネスをやっている社員、製品開発をやっている社員にとって価値のあることだと思っています。

求められる人物像、スキルという点については、そのような子どもの意見やアイデアをオープンに吸収できる社員がどんどん関わってくれたらなと思っています。



遠隔授業2コマ目の会社側の様子

遠隔授業の可能性に関して

◇ソニー岡田さん

今後の可能性としては、ソニーグループでさまざまな製品・技術があるので、そういったものを活用した授業コンテンツをより多様化していきたいと思っています。現在の課題認識としては、遠隔授業の応募学校数がまだまだ少ないので一緒に広報活動なども進めていけたらと思っています。



昨年9月にはプロ学主催の遠隔授業シンポジウムを実施しました。